

武蔵野日曜聖書講筵

大和民族の使命

――詩篇第85篇――

1987年1月4日

小池辰雄

日本よ、おごるなかれ 神のもとに心を翻して帰れ すべての罪を蔽い給う あなたの方から
帰ってきてください 恵信者 大和民族 恵信一如 「トープ」 大和を世界にもたらすために
天道地路

【詩篇85】（私訳）

楽長に指揮をとらせたコラの子らの絃歌

1 エホバよ、あなたは汝が国土^{くに}を恵み、ヤコブの命数^{さだめ}をひるがえし給うた。2 あなたは汝が民の不義^{おろそ}をとりのぞき、そのすべての罪を蔽^{おほ}い給うた。

3 あなたは汝がすべての怒りをまとめ、

その烈しき憤りをそらせ給うた。

4 我らの救いの神よ！ 我らを立ち帰らしめ給え！

我らに対するみ怒りをやめ給え！

5 あなたは永遠に我らを怒り、

み怒りを世々におよぼし給うや。

6 あなたは帰り来りて我らを生かし給わざるや。^{きた}

然るときみ民はあなたに在つて歡ぼう。

7 エホバよ、汝が恵みを我らに示し、

汝が救いを我らに与え給え。

8 私は聴こう、この神エホバ何を語り給うかを。

げに彼は平安を語り給う。

その民に、その恵信者に。

彼らが愚行に転ぜぬように。

9 まことに近い哉、彼の救いはその畏敬者に、

栄光は我らの国土^{くに}に。10 恵みと信実^{まこと}は共に会い、

義と平安は互いに接吻した。^{くちづけ}

¹¹ 信実^いは地から萌え出で

義は天から瞰下^{みおろ}した。

¹² またエホバは嘉^よきものを与え、

われらの国土はその産物^{なりいでもの}を出す^{いだ}。

¹³ 義は彼のみ前を往き、

道にその足跡を印する。

●日本よ、おごるなかれ

今日は新年最初の集会で、特に詩篇85篇を選び、「大和民族の使命」という大きな題を出しました。85篇は私の著作集第4巻『詩篇珠玉集』の中にとりあげてありますから、今日お帰りになったら、読み返してみてください。今日はもちろん85篇に即してお話はしますけれども、ひとつの使命感を持った内容にしたいと思っております。

楽長に指揮をとらせたコラの子らの絃歌

「コラ」というのは、ヘブライ語では「コーラツハ」というんですけれども、レビ族のヨハテの子、「イズハルの子コラ」と、出エジプト記6章に出てます。モーセとアロンとの義理の兄弟に当たり、祭司的な職についたわけです。私が「絃歌」と訳すのは、弦楽器――ギターみたいなものですが――その伴奏でみなこの詩篇というものは歌ったから、「絃歌」と訳した。もとは「ミズモール」という字で、「ザーマール」という字からくる。

¹ エホバよ、あなたは汝が国土^{くに}を恵み、

ヤコブの命数^{さだめ}をひるがえし給うた。

「命数」というのは、50年間のバビロニア捕囚から、ペルシアの王クロスによつてバビロニアが亡ぼされて、そして国に還ることになった。即ち、神さまはこのペルシアの王を使つてその御意を行い給うたというわけで、エルサレムに還つてきた。これが運命の翻りである。

ちょうど、エジプトに三百年間、ヨセフを中心としたイスラエルの族^{やから}が奴隷状態の生活をしてましたが、その苦しみを知った神がモーセをとおして出エジプトをさせた。あのときは艱難の中から救い出したわけです。

今度は、罪に服していた。イスラエルはその不信のために亡ぼされましたから。アッシリアをとおし、バビロニアをとおして神さまの審判の手がイスラエルにかかったわけです。それで、北イスラエル、南ユダは紀元前8世紀および6世紀にそれぞれ亡ぼされました。アッシリアに亡ぼされたのは紀元前721年、バビロニアに亡ぼされたのは紀元前586年あるいは587年。イスラエルの民は、特に預言者がその亡びにあたって素晴らしい預言者が続出しましたが、



「国が亡びても民は亡びないんだ」

という、彼らの信仰の素晴らしさというものが預言者において表れた。それがまた、キリストにおいて全うされるわけですけども。運命環境のいかにかわらず、いや、ダメになれば逆に素晴らしい人が現われてくる。

今朝、私はテレビを見ていたら、NHKの磯村氏が、

「日本よ、おごるなかれ。我々は本当にその戒めを受けなければならない」

と言っていました。日本は正直、経済大国で驕ってますね。精神的に、今はむしろイタリヤは復興しているという。私は、日本の一番精神的な障害となっているのは入学試験の問題と思う。受験難がいかにか青少年の精神的な伸び伸びとした展開のブレーキをかけているか。本当にこれは深刻な問題である。藤原氏が今朝、放談の中でも言っていました、

「教育の大改革をしないでどうなるか」

というようなことをいきり立って言っていました。全くそのとおりです。思い切った制度の大改革と、それから先生方の自覚ということが本当は最大の問題なんです。受験難と、また逆に、及第すると今度は勉強しないでのほほんの生活をやっている。憂うるべき状態です。これはやはり、

「我々、福音を受けた者たちは第二の国民に対する使命感を新しく呼び起こす、ま

たそういう使命を持っている」

というようなことを、テレビを見ながらいよいよまた私は感じた。とにかくもう、多をたのんでもダメです。個が本当に自覚して、そして

「千万人といえども我往かん」

というような魂を起こしていかなければ。いわんや、福音を受けた者はその精神をもって突き進まなければ。キリスト教が眠っていたら、もうこれはおしまいですから。

私は今日ここに題を書くときに、初めは「恵信一如」と書こうと思った。けれども、いやそうじゃないと。この詩篇の中にはそういう消息がもちろんあるけれども、今日は年頭における我々の、特に召団の自覚を新しくしなくてはいかんというわけで、この題にした。特に今、中年の方々が本当に、三十代、四十代の方々がその角度からこの福音のために挺身していただきたい。

●神のもとに心を翻して帰れ

出エジプトは艱難からの神さまの救い出しである。これはイスラエルの民に使命があるからモーセを使った。今度は、ペルシアの王クロスをとおして還ってきたが、しかし、その中心となっているのは、一番隠れた深い中心は第二イザヤです。イザヤ書40章から55章、これを書いた無名の大預言者が中心で、そういうような預言者たちの素晴らしい精神が詩篇の中に反映している。



「ヤコブの命数^{さだめ}をひるがえしてくださった」

という。命数を翻されたときに大事なものは、心が翻らなければダメなんです。運命環境が変わったといつて喜んでいようなことではダメなので、エルサレムに帰ったときに預言者たちと同じように、神のもとに心を翻して帰れと。これはヨエル書に素晴らしい言葉が出てます。この詩篇の作者はそのことがわかつていているひとです。

2 あなたは汝が民の不義^{おお}をとりのぞき、

そのすべての罪を蔽^{おお}い給うた。

と。非常に福音的な言葉ですね。

「不義」というのは、神さまに対する反逆の罪がこの「罪」という。「義」というのは、神との関係がしつかり立っていること。人間の横の関係ではない。一般に使う不義というのは横の関係で使いますけれども、聖書におけるこの「不義」というのは、神に対する義が立たないことです。「義」とは即ち、神の御意にこれ従うことが「義」ですから。

「アブラハム、エホバを信ず。エホバ、これを彼の義となし給えり」

という。

今、私は第十卷（『聖書は大ドラマである』1988年刊）を書いていて、実は創世記から出エジプト記に入っている。第十卷の構成は366日、毎日一頁ずつの内容です。それを今は書いている進行中です。今年の7月いっぱいまでくらいにやつつけてしまうつもりです。来年1988年に第十卷がですが、これは正直、今までの全十巻を総括したような、また旧約と新約をその中に全部織り込んで、短言をもって無限の内容をもったようなものを正直、魂をもって書いてます。これは全日本に私は読ませたいので、刊行会でももちろん第十巻として出しますけれども、単行本としてどこかの大きな出版会社からぜひ出したいと思っています。我々の福音の内容はそれだけの使命を持っていますから、隠れて小さな範囲ではダメなんです。もう時が満ちてきましたから。どうぞ、皆さんもその角度でたち臨んでいただきたい。

● すべての罪を蔽い給う

2 あなたは汝が民の不義^{おお}をとりのぞき、

そのすべての罪を蔽^{おお}い給うた。

と。イスラエルの民というのは、どん底にいて、本当に立ち返り立ち返り、神の民としての使命を進めている。

「罪」というのは対人間関係、「不義」というのは対神関係。神に対する関係も、人相互の関係も、そのまちがったものを全部、あなたは赦し、取り除き――赦しだけではなく、取り除きだね――また、覆ってしまったという。素晴らしい言葉です。詩篇の中には時々、素晴らしい言葉がやつぱり出てます。もう完全に福音的です。



羽のはえたケルビムが至聖所の幕屋の律法の箱の上にいる。箱の中にはモーセの十戒などの律法が入っている。「十戒」は本当は

「十言」

です。もともと神さまの断言命法なので、単なる戒めではない。その十言を中心とした、モーセに示された言葉が書きうつされたものが入っているわけです。

「律法は聖なるもの」

とパウロが言いましたが、それを犯した罪を贖う贖罪所がその箱の上にある。金の盤です。天使がその贖罪所を両方から向かい合って見ている。即ち、その罪を贖うところの事態が律法の上にあるので、もう既にその形が、幕屋の中の一番大事な――「ミシュカーン」というんですが――「奥幕屋」の姿が既に旧約と新約を象徴している。そして、その象徴を身をもって全うしたのがキリストです。今度の第十巻を読めば、聖書が全部本当につかめます。

「罪を覆い給うた」

という。だから、どうぞ、くよくよしなくてください。私たちは十字架で完全にすつとばされている人間ですから。人間は躓いたり転んだりします。けれども、決してくよくよしがない。今日の天気のように青天白日である。私はカーテンをあけたのは、陽の光を入れたかったわけで、まぶしくたつてそんなことはかまわない。

私は家の門に国旗を七日までかけておく。日本にただ私ひとり。ということは、日本人はこの国旗に対する自覚が足りない。太陽ではないですか。太陽がなければ地球はないじゃないですか。その素晴らしい太陽を国旗としている日本人が、この大恩恵、

「有りて在らしめる」

ところの太陽に対する喜びと自覚がなくて何だと。すぐ軍国主義みたいに考える。ダメだよ、そんなことでは。私はそういうことにははつきりと単独でも抗します。何と思われたっていい。もう私は正直、預言者ですからね。いつたおれてもかまわない。もう第十巻を書いたら、私はいつ仆れてもかまわない。詩という大使命がありますけれども、いいです、どうでも。私は烈々たる気持をもつてこの年に向かっている。

³あなたは汝がすべての怒りをまとめ、

その烈しき憤りをそらせ給うた。

これは非常に深く神さまの怒りを感じていたね。けれども、それをあなたはすべてやめてくださったと。

⁴我らの救いの神よ！ 我らを立ち帰らしめ給え！

我らに対するみ怒りをやめ給え！

恩恵を述べているかと思ったら、また恩恵を祈っている。これが心の本当の動きなんです。

「立ち帰らせてください」



と。この力は上からくる。なかなか立ち帰れないで困っていますが、どうぞ、立ち帰らせてくださいと。この

「シユープ」

というへブライ語は非常に大事な言葉で、

「立ち帰る」

ということが本当の前進であるということです。

我々は、マルチン・ルターが、

「生涯がこれ悔い改めである」

と言ったとおり、生涯が立ち帰りである。

「神の前に、キリストのもとに立ち帰ってやまない」

というのが、我々の姿である。その立ち帰る姿は――いいですか、自力ではないですよ――キリストに圧倒されるから、立ち帰らざるをえないんです。この福音の世界では、

「立ち帰らせてください」

ではない。

「私は立ち帰らざるをえません。このキリストの光に、力に、生命に、愛に圧倒されて、私は他にいくところがありません」

と。これが即ち「立ち帰り」である。「前進」であるんです。

今、日本キリスト召団の使命は本当に重大ですから。皆さん、いい加減な気持ちだったら、この集会から出て行ってもらおう。私は独りになったっていいんだ。

●あなたの方から帰ってきてください

4 我らの救いの神よ！ 我らを立ち帰らしめ給え！

我らに対するみ怒りをやめ給え！

と。神の怒りというのは義の表れです。義が通らなければ、神さまは怒る。これは天的な怒りだから。しかし、叱られたといって逃げたらダメなんだ、とっついていかなければ。その怒り給うところの神に、叱るお母さんのところに、泣きつつも抱きついていかなければダメなんだ。それでなお放すようなお母さんでは、そのお母さんがわるい。本当にそれは抱きこんでやらなければ。

5 あなたは永遠に我らを怒り、

み怒りを世々におよぼし給うや。

と言って、まあ大変な言葉です。それくらいユダヤ人というものはやはり厳かな義の気持ちを持っている。

6 あなたは帰り来りて我らを生かし給わさるや。

然るときみ民はあなたに在って歓ぼう。



大変な言葉だね、これは畳みかけて。今度は、「帰ってきてください」と。

「私は帰れないで困ってしまつて、もうどうにもなりません。あなたの方から帰ってきてください」

と。これと似た言葉がエレミヤの中にある。エレミヤ記31章18節、

「¹⁸…エホバよ汝はわが神なれば我を牽^{ひき}転^{かえ}したまえ。然ば我転^{かえ}るべし。」(エレミヤ31・18)

「私を引き返してください。そうしたら返ります」

と。これは「シューブ」という動詞の使い方と同じ言葉が使つてある。

「あなたが引き返してくだされば、返れます」

と。これは、

「お母ちゃん、来てちょうだい！ 起こしてちょうだい、そうしたら行けるわ」

というのと同じことです。本願の効力の力です。もう、神・キリストの――私は「恵信」というこの「恵」という字が好きだけれども――「恵み」という言葉が非常な力を持つていることを忘れては困る。力ある恵みなので、感情的なただ「よし、よし」なんていうのではない。相手に光を与え、生命を与え、力を与える。それが恵みなんです。キリスト自身をくださる。これが恵みの極致です。

「帰り来りて我らを生かし給わざるや」

というのは素晴らしい言葉です。本当に信頼した言葉です。

「然るときはみ民はあなたに在つて歓びます」

と。「あなたの中で歓ぶ」というので、ただ「あなたを歓ぶ」ではない。

⁷ エホバよ、汝が恵みを我らに示し、

汝が救いを我らに与え給え。

いつも対句的に言っているでしょ。「恵み」というのは別な言葉で「救い」という。漢詩もよくそうなってます。よく似ている。だから、中国人はよく分かると思いますよ、ヘブライ語も非常に簡潔ですから。

ヘブライ語というのは非常に弾力性がある。いわゆるヨーロッパの言葉は現在・過去・現在完了・未来完了などと形がいろいろあるでしょ。しかし、ヘブライ語は完了と未完了しかない。現在も過去も未来もありはしない。ただ完了と未完了しかない。しかもそれは単なる完了や未完了を表しているのではない。だから、旧約聖書の訳というのは、

「これが一番正しい訳だ」

なんていうことは誰も言えない。また訳しきれないんです、弾力性があるから。日本語みたいに非常に分析的な言葉でないから。過去も未来も、現在という、永遠的な現在という、そういう次元において語っているような言葉です。だから、ヘブライ人において信仰はどこまでも現実なんです。終末的なことでも終末的な現在となる。現に生きて在り給う神との



交わりの世界ですから。

「明日、信じますよ」

ではないんだ。

「今、現に受けとりますよ」

ということ。

●恵信者

私は聴こう、この神エホバ何を語り給うかを。

げに彼は平安を語り給う。

その民に、その恵信者に。

彼らが愚行に転ぜぬように。

「平安を語り給う」という。「シャーローム」です。この字は

「平安」

という訳がまず第一の訳です。それから、「平和」という訳もちろん出てきます。両方持つている素晴らしい字だ。「こんにちは」「さようなら」と言うときに、みんなこの「シャーローム」と言う。

「平安があなたにありますように」（シャーローム・ラーク）

という。神さまとの交わり、それがただしくなっている義の事態が「平安」だという。神との関係が不義ではダメ。義であるときには、

「エホバを信ず。まこととする」

ということとは、

「あなたは本当です、私はうそっぱちです。あなたはプラスです、私はマイナスです」

ということ。福音の世界は力がないと、これはみんな観念ではダメなんです。

「福音は言葉にあらず、力なり」

とパウロが言ったのはその消息です。「力」と言おうが、「生命」と言おうが、どちらでもいい。

その次に私は、

「恵信者」

と訳した。そんな訳は他にない。原語では「ハシディーム」という。これは「ヘセッド」という字からくる。これは大事な字です。「ヘセッド」という字はもともと「恵み」という字で、あるいは「愛」と訳するときもある。恵みと愛は同じことです。神の愛、神の恵み、これが「ヘセッド」です。だから、「ハシディーム」というのは、

「恵みを受けた者たち」

ということ。それを普通は「聖徒」と訳しているが、なにも「聖徒」ではない。「恵みを受



けた者」ということで、恵みを受けた、信受した、「恵信者」です。これが本当の「ハシディーム」という「恵みを受けた者たち」です。「聖徒」なんていう訳では中身がわからない。「恵信者」なんです。

「恵信一如」

の事態を持つている人を「ハシディーム」という。我々は即ち、この「ハシディーム」「恵信者」なんです。恵みを信受している者です。キリストという恵みを信受している者。これが即ち恵信者です。神のみ民は即ち恵信者で、彼らが愚行に転じないように、ゴタゴタになりませんようにと。

「妬み争い」というのがあるね。妬みという感情はどういうまちがいからきているかという、神さまは我々一人ひとり

「天下一品」

に造っておられる。比較を絶した者なんです、この人格というものは。それを、他を妬むならば、自分の人格を認めないということになる。神さまに天下一品であるという存在。何びともまねすることができない。誰が同じ顔をしていますか。みんな違うでしょ。

「神さまは最大の芸術家」

というのは、神さまはひとつも同じものを造らない。顔すらも、世界中に何億人いようが同じ顔というのはいない。似ている顔はあるでしょう。同じ顔はいない。ましてや、その存在そのものはみな絶対特殊なんです。それを人がどうだと言つて、妬む人は自分の人格を認めないことになる。こういうことはまだ誰もおそらく言わないでしょう。

だから、神さまは一人ひとりになくてならない大事なものを与えておられる。それを自覚して、そこに使命を感じて、それをやれと。何も大学に入らなくなつていいんだよ。手仕事人で結構だ。時々、テレビに出てくるね、一生を素晴らしい手仕事にかけている人が。私はああいうのを本当に尊敬して見るよ。生活と自分が一つになっているような、生活そのものが神の栄光を黙つて表しているような、これが本当の人格というものです。それを、人を妬む人は自分を本当に見えていない、自覚していない。自分を人格として認めてない。そういうことになる。争いも同じことです。

●大和民族

私はなぜ今日、

「大和民族」

と書いたか。大和は何処から来るかということだ。我々、大和を世界にもたらすところの民族であることの、「大和」という字をもういっぺん自覚し直してもらいたいというわけだ。今朝、私はテレビの方々のチャンネルを見ていたら、フィンランドのことも出てきた。フィ



ンランドの国民は永世中立だ。しかしながら、他のものに侵されてはいかんとって、国民皆兵だね、男子は。不届きなやつはもちろん防ぐ。それだけの実力は養えと。けれども、絶対に戦争はこつちからはやらない。

「大国の間の調整をしたいというのが我々の悲願である」

ということ責任者が言っていました。フィンランド国民の精神は素晴らしいなと思って私は聞いていた。

そこへいくと、今、日本は本当に精神的に中心がないね。これは一番亡びやすい国だね。外国が恐ろしいのではない。日本人自身が自らを亡ぼしていく。青年男女諸君の本当の自覚を私は促したい。ここの中にはたった数人しかいない。しっかりしてください。なにも青年に限らない。誰でもがです、本当に。私は「エン・クリスト」30号に年頭のこの話を書きますから。

9 まことに近い哉、彼の救はその畏敬者に、

栄光は我らの国土^{くに}に。

「畏敬者」は「ヤーラー」という「畏れる」という字です。ビスマルクの演説の中に、

「我々ドイツ人はただ神を畏れる。その他は何をもおそれない」

という有名な言葉がある。世界を導き給うところの神だけは畏れるという。神の前に平伏すところの、そういう為政者がひとりもないね、日本には。どんなに偉そうなことを言ってもダメだよ。軍備が1%だのどうのこうのと、そんなただ数字だけを問題にしている。本当の外交は神を畏れるところから始まるんです。そのような神を畏れるところの政治家が、本当の外交ができるはずなのに、それがいないからできない。数字の末梢のことばかり問題にしている。

「さすがは日本人だ」

と、どの向こうの人が言うかね。白虎隊に表れている青年、四十七士の義士に表れているあの魂はどこへ行ってしまったか。利害打算ばかり考えている。

●恵信一如

10 恵と信実^{まこと}は共に会い、

義と平安は互いに接吻^{くちづけ}した。

このへんは私の『詩篇珠玉集』の中に詳しく書いてあります。「恵みと信実^{まこと}」は新約聖書によく出てくる。あれと同じ字です。

「ヘセッド（いつくしみ）とエメツ（まこと）」

「カリス（めぐみ）とアレテイヤ（まこと）」

あの新約の言葉はもちろん旧約から来ている。

「キリストは恵みとまことに満ちている」



という。キリストは神の恵みの現象体であり、神の真理、信実である。あの「エメツ」という字は「アーメン」という字から来る。神のアーメンに対してアーメンをもつて応える。ところがアーメンで応えない。そこに不義が生じた。「しんじつ」の「しん」は「信ずる」の、

「信実」

という字です。藤井先生が

「真実、真実」

と言ったのは、あれは心理的なただ「まこと（真）」ということだが、そうじゃないです。「信実」は関係において決して裏切りのないところ。またそれ自身が義であるもの。

言葉は実はどうみんな連関しているんです。分析していない。義も愛も信も全部、連関した円環関係です。それを妙に観念的に分けようとするとかえっておかしくなる。

義と平安は互いに接吻せり。

義のあるところに平安があるので、一つだということです。分けることができない。それを「接吻せり」という。我々に観念にひびく言葉が彼らには内容が具体的なんです。だから、その次の節は、

11 信実^いは地から萌え出で

義は天から瞰下^{みおろ}した。

と言っているでしょ。

「義は天から見下ろしている」

なんて、そういう言い方をする。ヘブライ人というのは、こういう言葉が、我々に観念的にひびくようなものが絶対に観念でない。全部、具体的なんです。「義が天から見下ろしている」なんて大体言えないんだよね、そういう現実にいない限り。

「アーメンという事態がこの大地から萌え出ている。春の草のように。義は天から見下ろしている」

と。義と信実がまた一つになっている。

「アブラハムはエホバを信じた。信とした。そしたら、エホバはこれを義とした」

と。あれと同じことです。義と信実。

私はこういうのを読んでいると、楽しくてしょうがないんだが、あなた方は楽しくないの？ しやつちよこばつてしまっているのではないよ。中身はすごいんだから。時々、私のラブレターだと思って、詩篇でも何でも私の書いたものを読んでもくださいね。お手紙をいただいたら、「ここのところが私の返事ですよ」と、そう書くかもしれない。

●「トープ」

12 またエホバは嘉き^よものを与え、



われらの国土はその産物^{なりいでもの}を出す。

これは産物のこと。

「善きもの」

は、ルカ伝では

「聖霊」

だけれども。この「トーブ」という「善きもの」というのは、大変結構なもの、味のいいもの、見てうるわしいもの、それがこの「トーブ」という字なんです。創世記の第1章で私はいつかお話ししたでしょ。神さまはいろいろ造った。そうしたら、

「まことに結構だ、いいなあ」

と。ちょうど「いいなあ」というわけだ。「好い」という字はおもしろいね、「女の子」と書く。女の子というものは好いものだ（笑）。ああ好いなあと。あれは「善」「良」という字を書いたら、こんな訳はダメだ。大変うるわしい。善悪を超越した世界だと。

日本人はこの「美」の民なんです、本当は。日本人の感覚は。善だの悪だの言っているのはその次の世界。それ以前の、樂園喪失以前の世界は美の世界です。だから、

「アダムとイブは裸であつてもひとつも羞^はじなかった」

と書いてあるでしょ。善悪の木の果を食べたら、そうしたら何のかんのと判断が出てきて逆におかしくなってきた。判断以前の、判断を超越した世界。これは柳宗悦も書いている。判断の世界ではダメだよ。もうひとつ上からの世界、超判断の、超善悪の世界です。

「美^{うつく}しき魂」

という言葉がある。ゲートも書いている。『美しき魂の告白』と。スザンナという女性のことで。さすがはゲートだね。美談というでしょ。善談とはいわない。美しき話というでしょ。美しい魂、美しい心だと。日本人の感覚はむしろそういうところにあるのが本当に美しい。

この「よきもの」がその「トーブ」なんです。まことに結構なもの。農薬で害されていないもの。われらの国土はその「産物^{なりいでもの}」を出す。この「産物」と「よきもの」は同じこと。

¹³ 義は彼のみ前を往き、

道にその足跡を印する。

「義が御前を行き、その足跡を印する」とは素晴らしいね。キリストを見るようだ。キリストという義人は神さまの御前を行って、その足跡をイスラエルに、聖地に印して行かれました。ああこれがキリストの歩き給うた所だといって見てくるわけです。

私は、ある所でご馳走を見ていた。他の人はご馳走を食べているんだけど、私はご馳走を見ていた。見ていても楽しいんです、目で食べるから。どういう状態になっても、本当に豊かな気持ちでいられるんです。

「いやあ、うらやましいな。俺は食べられないな」



なんて、そんなことは思わない。

●大和を世界にもたらすために

「やまと」という字を大言海で引きましたら、「倭」「大和」「日本」はどれもみな「やまと」と読む。「やまと」というのは

「山間処」
やまと

の略なんだそうだ。日本は山の国だ。なるほど70%が山で30%が平地で、ドイツの逆ですわ。「やま」は「山の間」、「と」は「処」ところ。本来は、「山間処」というのを「やまと」に略した。たとえば、「たびひと」のことを「たび」というでしょ。あれと同じだというわけです。

「大和国八四方、皆山ニシテ、中ニ平地アルヲ以テナリ、山背ニ対ス、又、日本ヲやまとト訓ムハ、大和ヨリ移レルナリ。奈良朝ノ頃ハ、外国ニ対シテ、日本ト云ヒシナリ」
ヤマト

と。神武記の中にこういう言葉があるそうだ。日向ひゅうが（九州）から東の方へ向かって行こうとするときに、

「東ニ美地有リ、青山四周ニ云々、彼地必ズヤコレヲ尊ブベク、モツテ天業ヲ天下ニ弘メルニアタイスル。蓋シ六合（宇宙）ノうちにこんな素晴らしい国は他になかる」

というような意味のことが書いてある。だから、日本の国は山の国、山間の、山がある処であるというのが「やまと」の言葉の起こりだそうです。それがずっと後になって「大和」になった。天平勝宝年間に「大和」と改めたと書いてある。

我々としては大和たいわを世界にもたらせる、ちょうどソ連とアメリカと中国なんていう大きな、地理的にも大きな国の真ん中に、太平洋の中に日本というものがあるということは一これは内村先生の「知人論」の中にも多分出ていたはずですけども――そういう大事な、歴史的にまた地理的な意味において非常に大事な位置にある。だから、本当はアメリカと軍事同盟なんか結んだのが大間違いなんだ。これは永世中立で始めからいくべきはずだった。フィンランドではないけれども、大国の間に本当に調停を結ぶためには、国は小さくても魂は太平洋のようにでかくなければダメなんだよ、魂は。太平洋を池としているんだから。太平洋もなお小さな池としてゐるんだ（笑）、「小池」というのは。太平洋も大した池ではないくらいに思つて、それくらいでつかい心でもつて、大和たいわを世界にもたらすために、その精神に――今の現状はどうであろうとも――魂が翻つていかなくてはいかん。

もうひとことではない。あなた方一人ひとりが、

「千万人といえども私はその自覚で行きます」

という一人ひとりになってください。他を頼むことはひとつもいらん。そういうのが集まった召団なら、もの凄い召団だ。数はどうでもいい。問題は質の問題。私は、どの召団にもそれぞれの使命があると思つて、はつきり自覚して祈つてゐるんですよ。それを、

「小池先生はどの召団にはどうだ」



なんて、そんなくだらしないことを思ったら大間違いです。そういうことを思う召団は自分がダメになっていく。我々はそういう大和を本当にもたらせる大和民族である。神の大和民族です。

私は兄貴に聞いたら、

「辰雄はお昼が近くなつた時に生まれたんだよ」

と言った。私はやはりゲートと同じように、太陽が中天に臨むころに生まれたんだつてき。ありがたいことを聞いた。

「ゾンネンキント」「太陽の子」

なんだよ、僕は。だから、なおさら国旗は掲げておく。「あれはキチガイではないか」なんて、いいよキチガイだつて。「国粋ではないか、石を投げてやれ」なんて。

内村先生が、

「私は日本のため。日本は世界のため」

と言った。あれは名言です。内村先生の千古の名言です。

「世界はキリストのため。すべては神のため」

という。さすがは、内村先生は大きな魂だね。内村先生をもたげて、しよつちゅう

「内村鑑三記念講演会」

なんてやつているが、そんなのはどうだつていいけれども。本当の精神を継いで、そこでおしまいではダメだ、どんどん伸びて展開していかなければ。

「矢内原読書会」

なんていつてね、ただ読書会をやつたつてダメだよ、それでは。まあそれは参考にはしたつていいさ。けれども、どしどし本当に告白して進んで行かなければね。ということは、聖霊がないと、みんなそういうことになる。無量無限の展開ができなくなる。御霊のことは今までもおろそかにされていたが、本当に十字架が土台になっていれば、聖霊は来ざるを得ない、臨まざるを得ない。単に

「召団」

ということばかり私は言っているのではない。皆さんは、この召団がそれだけ大きな使命を持っていることを大いに自覚していただきたいと、こういうわけです。

●天道地路

本当に日本的ならば、これは世界的なんです。ということは、キリストの天道に即すること。天道地路という。地面でもつて私たちは一人ひとり各々の足で歩いていきます。誰もその同じ路を行かない。みなその人生はみなそれぞれでしょ。みんな特殊な路を歩かせられている。それが天道に即するかと、これだけが問題です。天道に即したときに、この地路という特殊性において普遍永遠なるものが表れるわけです。



菊の花は菊の花において太陽の光が表れている。バラの花はバラの花において太陽の光が表れている。それぞれ特殊において普遍なるものが表れている。そういう消息です。太陽の光を本当に受けているか。キリストの光を本当に受けて生きているか。そこだけが問題。教会であろうと、無教会であろうと、カトリックであろうと、何だつていいよ。

「問題は本当の意味において原始のところに入っているか、使徒的な信仰の中にあるか、キリストに直結しているか」

これだけのことはなしです。そうしたらば、自由自在です。

こないだのソネットの第四で私は書いたでしょ、

「どの宗派かなんて、そんなことは問題ではない。キリストに直接に走っていけ。

そこから本当のものが表れていくんだ」

と。私はあの「新宗教改革」のソネットはまだ続けて書きます。もう『エン・クリスト』第30号ができているんだけどね。そういう、天道地路です。それを道路という。あなた方は本当の道路を歩いてください。おもしろいね、道路という言葉も。漢字はおもしろいですよ、「路」は各々の足で歩くところだよという。

そういうような

「和をもつて尊しとなす」

という、その和がくるところは、愛がなければ和は来ない。キリストに恵まれたら、その恵みを施しているところに本当の和がくるわけだ。平安がきたら、その平和ならしむるものとならなければ。キリストが言われたとおり。

「さいわいなるかな、平和ならしむる者。そのひとは神の子と称えられん」

でしょ。神の子ならば、平和ならしむる者、在りて在らしむる者。どんな障害も大丈夫です。そういうようにして進んで行きましょう。私は年頭にこの自覚を新たにしていこうと思つた。この85篇に「平安」という言葉が出てきたから。恵みと義、これも渾然^{こんぜん}としている。

「天地一如、恵信一如」

の世界です。そういうことで、我々は大和民族であります。キリストという義の太陽の、愛の太陽の、光の、生命の太陽の子ですから。

「エン・クリスト」（キリストにあつて）

というのは正にそういうものの凄い内容のことだから。「エン・クリスト」が単なるお題目になつたらダメですよ。現実として恵信者である。「恵信一如」の人間である。

「生きることが即ち証することなり」

と、行きましょう。お互いにそれぞれの使命を尊びながら、相助けながら進んで行く。人間だから躓いたり転んだりするよ。そんなことはいいよ。どんどん進んで行こう。

